



巻 頭 言

バ ラ ン ス 感 覚

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 村井 敏 信
鯉 渕 学 園 講師

以前、「バランス感覚」という言葉が盛んに使われたことがある。私は言語学者でないから、この言葉がどの程度認知されたものかよくは知らないが、あまり一人よがりにならず、偏らないで、均衡のとれた考え方をする人に対して、「あの人はバランス感覚のよい人だ」といった表現をしてきた。少し気取った言い方をすれば、「バランス感覚」とは、テーゼとアンチテーゼとのバランスをとる能力で、社会生活を営んで行く上に必要な「知恵」のようなものであると受け止めてきた。

しかし、最近、バランス感覚のよい人間が次第に減ってきているように思える。

オウム真理教事件が明るみにでたとき、大学院の卒業生などいわゆる高学歴の信者が多いのに人々は驚いたものである。なぜ学歴の高い人間があのような極端な考え方に走ったのか理解に苦しんだからである。しかし、それほど驚くことではないのかもしれない。そもそも、バランス感覚は教えられるものではなく、自ら体得するものである。学校では、知識は教えてくれるが知恵は教えてくれない。

自分の肉体や心に痛みを経験したことがないと他人の肉体や心の傷みは理解できない。子供を育てる場合、全く怪我や挫折をさせないようにすべての危険から遠ざけるより、致命的にならない範囲では、危険に出会わせることも必要であるように思える。そして、その体験とこれ乗り越えることが「バランス感覚」の修得と育成につながるような気がする。

昔のことであるが、農芸化学の専門課程に進学し、最初に学んだことは化学天秤の使い方

であった。サンプルを天秤皿に載せ、もう一方の秤量皿に分銅を載せたり、降ろしたりしながらバランスをとって重量を測定する方式のものである。このため、ものを秤量することは大変に負担と時間のかかる仕事であった。それでも、天秤（バランス）の原点としての仕組みと意味は視覚的に理解されたものである。

現在はあらゆる分野で、ブラックボックス化とデジタル化が進み、操作さえ覚えれば、仕組みやプロセスが分からなくても結果が出せる時代になってきた。ブラックボックスの発達と普及は人に多くの利便さと迅速さを与えたが、バランス感覚については修得と育成を阻害しているような気がする。

最近は「マスコミ」もバランス感覚を欠いてきているようにみえる。報道の姿勢が問題を単純化し過ぎているように思える。「良いか悪いか」、「イエスカノーカ」など単純に結論を求め過ぎる。

例えば、原子力発電の問題にしても、問題点のみが大きく報道され、必要性についての報道は少ない。現在、日本の電力の約30%が原子力により供給されていることを知らない人も多い。電力消費が年々増加しているとき、原子力発電による電力を削減したらどうということが起きるか、これを火力発電で置き換えた場合、発生する二酸化炭素の問題をどうするのか、現在の技術レベルで太陽電池に置き換えたらどれほどの面積が必要なのかなどについての報道は極めて少ない。こうした問題については感性に訴えるのではなく、理性的な判断を求めるバランスのとれた報道を望みたい。